再受験を考える学生とのカウンセリング

櫻　井　信　也

I　はじめに

学生相談では，他大学を再受験したい，と訴える学生によく出会う。圧倒的に男子学生に多い。多くは不本意入学の学生である。入学後，慌ただしい時間が経過して，少し落ちつく5月，6月頃に来室する。入学式直後も稀なことではない。

話し合いのなかで，再受験の覚悟を決める学生もいるが，再受験をあきらめようとしてもきれいさっぱりとはいかず，しばらくはぐずぐずした気持ちを引きずりながら学生生活を送る学生もいる。中には学生生活全般から退却して引きこもる学生さえいる。

再受験に失敗しても1度きりで終わる学生がほとんどであるが，稀に失敗を数年繰り返す学生もいる。こうしたケースは，暗澹とせざるを得ない事態をむかえることが予測され，できれば早いうちに断念させたい。神経の衰弱から勉強の効率は低下し，仮面浪人を続ければ大学への適応もますます困難になるからである。

再受験のカウンセリングは，その訴えを即座に否定し，大学への適応を無理強いするのではなく，学生が身の振り方を考え，落ち着くまでを支えることである，と筆者は考えている。学生相談では，ないがしろに出来ない古典的な問題であると思うが，何故かメインテーマとした論文は見当たらない。そこで，本論文では，再受験の諸相とそのカウンセリングについて述べようと思う。

再受験についての相談は，多くは新入生からである。はじめに，この時期の心理的特徴について述べる。

II　再受験の訴えと入学期

鶴田（2001）は，学年に注目して学生期（大学に入学してから卒業するまでの期間）を入学期（入学後1年間），中間期（2年生と3年生），卒業期（卒業前1年間）という時期に分け，それぞれの時期の心理的特徴について述べている。

入学期は，「今まで慣れ親しんできた生活から離れて，新しい学生生活へと移行する時期」であり，新入生は大学への入学にともなう課題と，入学以前から抱えてきた課題に直面する。学業の領域では，大学のカリキュラムに慣れること，自分の関心領域を選ぶことが課題になる。進路の領域では，不本意入学や進路の変更，入学後の目標喪失などの相談があり，大学や学部に所属感をもつことが課題になる。学生生活の領域では，学生生活（高校までの生活とは大きく差がある）に適応していくことが課題である。対人関係の領域では，小集団（クラブ，サークル）に入る難しさ，心理的問題にともな

う対人関係の難しさなどの相談があり，新しい対人関係を開始することが課題になる。この時期は，「新しい生活にうまく適応できない場合には，過去になじんだ習慣や友人関係への逃避が生じやすい時期」である。再受験の訴えには，対人関係の領域での挫折が関係することもある。周囲に馴染めない，という理由で再受験を考える学生も多い。高校では，受験が主なテーマになりやすく，勉強だけをしていれば済むという禁欲的な態勢をとりやすいが，大学ではそれはできにくい。個性と個性が向き合ってしまい，親密な友人関係をもつ能力に乏しい学生は深刻な疎外感を体験することになる。大学で親密な友人関係をもたずに学生生活を全うすることは困難なことである。

吉良（2001）は，入学期（入学後1年間）の課題のひとつに，「受験生としての心理的課題を終わりにすること」があるとして，「大学生にはなっているけれども，心理的にはまだ受験生の人がいます。特に，第一志望の大学や学部に不合格になって，やむをえず別の大学・学部に入学した人の場合，それが大きなテーマになりがちです」と指摘している。心理的な意味で大学生になることは「自分のプライド，これまで思い描いてきた自己像，自分の将来の志望や願望などに向き合って，そのうちの一部を断念したり，現実に合うように修正したりすることを意味する」のである。

III　再受験の背景にあるもの

再受験を訴える学生の多くに共通するのは，念願の大学に合格を果たせなかったことでの名誉心と自尊心の傷つきであり，再受験は自尊心回復，名誉挽回の試みである。何故，これほどに学校歴への執着が生まれるのか，その理由について考えてみる。

1. 価値の一様序列化

日本社会に抜きがたくあるのが価値の一様序列化である。河合（1976, 1995）は，日本を母性社会とする視点から，日本人の一流大学志向について論じている。母性原理は，「包む」という機能を強くもっており，その場に属す限り，能力差などに注目せず平等に扱う。父性原理では，能力差の存在をはっきりと認め（個性の認識），個の確立を大切にする。日本は母性原理の優位な社会であるが，平等といいつつ全体の運営のために，その成員に序列をつけることが必要になる。本来，母性原理に従うと，この序列は年齢とか集団の所属期間の長さによって決定されるべきものなのだが，教育の場では父性原理によって能力による序列が入ってくる。しかし，欧米と違い，能力差を前提とした個性の認識ができていない現代日本においては，子どもを能力によって一様序列に位置づけることになり，それが子どもの全体的人間評価に結びついてしまう。個性の認識がしっかりあればこのようなことは生じない。

学力による一様序列化は大学にまで及んでいる。日本中の大学が東大を頂点に見事に序列づけられて並べられ，個々の大学が個性的な顔をもたない。受験の失敗（学力の劣等性の自覚）は自らの存在価値そのものをおびやかし，惨めさにつながるのである。そこで再受験は自らの価値の回復に繋がる試みである。

2. 学校歴と所得，社会的地位

「学歴社会」とは，「地位達成に対する学歴の客観的有効性，およびそうした学歴の有用性や価値に対する社会成員の主観的認識が高い社会のことを意味する」のであり，「学歴」という言葉は，「個人が修了した学校段階（いわゆる『タテの学歴』，高卒・大卒など）を意味する場合もあれば，個々の学校段階の内部で個人が卒業した学校名（『ヨコの学歴』，○○大学卒など）を意味する場合もある（本田・平沢，2007）。

島（1999）によれば，学歴，すなわち大卒か高卒かという学校段階の差異にもとづく所得上昇効果は高度成長期と比較して薄らぎ，その一方で，どの大学を卒業したのか，ひいては有名大学に入るためにどの有名進学高校に入ったのかという学校歴が重要になってきた，という。樋口（1994）の実証的研究では，「有意に入試難易度の高い大学ほど卒業生は上場企業や官公庁の部長以上の役職者になっている確率が高い」との結果を得ている。

学校歴が地位や所得に作用することは一般的認識であろうが，再受験を考える学生が地位や所得を理由にすることは少ない。彼等がより重視するのは，漠然とした世間からの評価である。彼らが再受験を考えるのは，多くは誇りや名誉のためである。学校歴の作用は，入試難易度の高い大学への世間の評価を高めるものであり，それ故，再受験の動機づけを強めるのである。

Ⅳ　再受験の諸相

1. スチューデント・アパシーと再受験

笠原（1973）は，大学生の長期留年者に稀ならず見出される「特有の無気力現象」について記述した。当時，笠原は，未だ記載されていない新しい神経症的力動的機制によると推測し，「神経症性アパシー」と呼称したが，それは「精神医学がすでによく知っている分裂病の無感動，無気力やうつ病の抑止，抑制と異なるところの，さらにまた神経症性不安に伴いがちのあの弱力的，消極的態度とも，またある種の性格異常者に見られる実生活からの恒常的な逃避とも異なるところの現象をそこに見た」（笠原，1978）からである。典型的には本業である学業からの退却（部分的あるいは選択的退却）である。

山田（1987, 1998）は，スチューデント・アパシーを軽症と重症とに分けている。軽症は，学業からのみの退却である。笠原（1978）の言う「部分的（あるいは選択的）退却反応partial（or selective）withdrawal reaction」である。「無関心無気力が生活の全領域にわたらず，むしろ選択的だということ，学生ならふつう専門の学業分野に限局されるということである。彼らは本業ともいうべき学業以外では平均以上の活動性を示すことも決して稀ではない」（笠原，1976）。アルバイト先で，周囲が感嘆するほどの真面目な働きぶりを示したり，熱心にサークル活動に取り組んだり，しばしば重い荷物を背負っての登山をしたり，趣味について凝り性ぶりを発揮してパソコンの操作や組み立てにしろうとの域を越えた知識と技術をもっていたりする。

重症例では，キャンパスに現れなくなり（学生生活全般からの退却），ひとり文学やSF小説に耽溺

し，音楽を聴く。人間関係からも引きこもりがちとなり，登校刺激とならず，葛藤を感じないですむ昔の友人としか会うことをしない。それも自分からさそうことはない。大学からの手紙は封も開かない。電話にも出ない。新聞も読まない。彼らは，社会の出来事については無視する。それは，「自分だけが取り残される時の流れを感じなくてすむ」からである。喩えると，「不安という風の来ないくぼみに時間よ止まれと念じてしゃがみ込む」状況である。葛藤を避けたまま何年もアパシーが続く。決断を引き延ばす。自主的に退学することもない。

重症のアパシー学生から再受験の訴えを聞くことはないが（彼らは社会的現実に係わらない），軽症例はしばしば再受験の希望をもつ。以下に事例を紹介する。

事例1　軽症アパシーの男子学生

この男子学生は，専門課程に進級できず一度留年しているが，留年した年の秋に来談している。

学業は全くの放棄に近かったが，クラブ活動（ワンダーフォーゲル部と心理学研究部）には参加し，友人もいた。選択的退却であり，軽症例である。

一年浪人の後，再び第一志望校の大学受験に失敗。鬱々とし，劣等コンプレックスと不全感に苦しんでいたが，入学してすぐに教養科目の臨床心理学と出会い，「こんな学問があるのか」と感動したという。他大学に入りなおし臨床心理学を学ぼうと思ったが，気力もなく決心がつかずにいた。臨床心理学以外の講義は虚しく，ほとんど出席しないでいること，家では文学に耽溺していること，山に登っているときだけは憂さを忘れる（劣等コンプレックスが頭から離れる）ことなどを語った。彼は，1度来室したのみで，面接の継続は望まなかったが，卒業の年の3月に再来室した。来談後，学業は細々とこなし，最終学年（1度留年しているため5年目である）になってやはり再受験をしようと決め，自分でもよく出来たと思えるほど勉強し，無事に心理学科のある希望の大学に合格したことを報告してくれた。1回のみの面接については，筆者が再受験について善し悪しを言うことなく聴いていたことが新鮮な印象として残っていること，ただ，再受験について相談するのは葛藤に直面することになり，辛いので面接を続ける気持ちにはならなかった，という。遅い決断については，「もっと早く行動できたら良かったのでしょうか？でも受験勉強は無理だったと思う。5年目だから出来たのだと思う」と語った。

2. 再受験と統合失調症

(1) 再受験を繰り返した事例

稀に再受験を何度も繰り返す学生がいるが，そこに重い病理を見ることがある。

事例2　統合失調症（分裂病）発症の前段階にあることが疑える男子学生

劣等コンプレックスから再受験を繰り返す学生がいた。この学生は，自分の一流大学志向について，端的に「この学歴社会では一流の大学に入って自分の身を守らないと駄目だ」と語った。入学して2

年目の5月（休学しているので未だ1年生であった）に来室し，再受験に失敗したが来年も受験したい，と訴えた。彼は，一年浪人している上に，仮面浪人（通常，大学に籍を置きながら受験準備をする大学生を意味する）をしているため精神が疲労しているのがはっきりとわかった。このまま受験勉強を続けることはできないと考え，筆者は「神経が疲労していて，さらに受験勉強を続けるのは無理だと思います。焦るばかりで能率が上がらないのではないか？」と話し，休養を勧めた。筆者が考える休養とは，受験勉強以外の生活をすることであり，憂さを晴らせる行動，例えばクラブ活動での仲間との関係を楽しむなど，である。学友との関係ができて学生生活を楽しめるようになれば再受験を断念できると考えたからである。彼は，意外なほど素直に応じた（「そうですね」）が，その後，翌々年の3月に突然来室し，「ずうっと受験に失敗してきた。来年も国立大学を受験するつもりでいる」ことを語った。焦躁感がつよく，余裕が微塵もなく差し迫った様子は尋常ではなかった。「多浪はよくない。このままではやばい」と何度も焦燥感を訴えた。一年目の浪人時代のくしゃくしゃになった模擬試験の成績をポケットから取り出し，当時は第一志望の大学に合格しても不思議ではない成績だったのです，と語った。

その後，挨拶も名前も名乗ることなく，いきなり不安を訴える電話や予約なしの来談は頻繁だった（開室前に現れ，相談を終えると一旦は帰り，夕方に又やって来る，というように）。服装は人目を気にして身ぎれいにする配慮もなくなっていた。

彼の病理を理解するには，中井（1984a, 1984b）の分裂病の発病過程論が役立つように思われる。中井は，分裂病の発病に先行する時期を「余裕の時期」，「無理の時期」，「焦慮の時期」，「発病時臨界期」に分けている。出発状態である健康な生を「余裕の時期」と名づけているが，それは，くつろぐことのできる時期であり，「自己価値感情に関して中立的な（自分の価値が上がりも下がりもしない）行為，たとえば趣味や雑談ができる」（中井，1984a）。分裂病はけっしてゆとりをもって生きている状態ではじまることはなく，最初には，無理をしている状態がある（「無理の時期」）。分裂病への傾きを持つ人の無理は，根本的な，あり方の転換を必要とし，実際人が変わったようになる。たとえば，突然勉強をはじめるとか，にわかに勤勉になるとか。この“一念発起”は，「次第に他のことを考えるゆとりをなくさせる。自分の価値を高めるか，逆に低めるようなことしかできなくなる。つまり釣をしたり，散歩をしても別に自分の価値は上がりも下がりもしないが，そういう行為は次第にしなくなる」（中井，1984b）。「無理の時期」から「焦慮の時期」への転換を特徴づけるものは，焦慮がもはや行動によって解消しないという一事である。「たえず揺れている土地の上に家を建てようとする場合のように努力がその都度空無化する『流砂状況』」（中井，1984a）である。焦慮の行動による解消が不能になるとともに努力は停止にむかい不安が急速に増大する。

そのうち多彩な自律神経症状が出て，体の調子がとても乱れる。発病時臨界期である。「眠れなくなり，毎晩同じ悪夢を見たり，頭痛がしたりする。ついで，追いつめられた感じが，実際に何者かに追われている感じに変わる。不安は，あたりにただならぬ気配がただようという感じに変わる。次第

に何事も偶然と考えすごせなくなる。たまたま通りかかったところに，店員が水をまくと自分に特別の悪意をもってしたように感じる。『おたずね者』の気持ちに近くなる。自分の心の秘密が，人にみすかされているような感じも起こり，人に会ったり，外へ出るのがこわくなる」（中井，1984b）。

彼は，一心不乱の受験勉強という「無理の時期」を経て「発病前段階」の「焦慮の時期」にあるように，筆者には思われた。激烈な不安ともはや行動によって解消しない焦燥感があり，しかも完全不眠が疑えるので（彼は，身の破滅の不安を訴えるのみで，「眠れているか」という問いにはっきりと答えなかった。それどころではない，という感じだった），精神科の受診を勧め，同伴した。医師の判断は，「まだ確定診断はできないが分裂病を疑える」というものであり，入院を勧められた。1ヶ月の短期入院だったが，退院後に父親から電話があり，「今は，以前のことが嘘のように良くなっている。国立大学へのこだわりもほとんど口にすることもない」とのことだった。彼からは，「1ヶ月ほど入院し，今は落ち着いていること，何とかどこか大学を卒業してから国立大学の大学院に進学しようと思います」との電話があった。その後，彼は，何度か治療の中断と国立大学へのこだわり（再受験を口にする）が同期して現れたが，30歳を過ぎてから大学の夜間部に入学し，5年を掛けて卒業している。

(2) 統合失調症学生の夢

統合失調症の学生は一流大学志向に親和的である。蜂谷・村田（1989）は，統合失調症者のリハビリテーション（社会復帰）過程における重要な課題について，「程度の差こそあれ挫折体験を経てあるべき自己像を修正し自己価値の転換に至る『障害相互受容（障害者のみならず治療者や地域社会との相互受容）と自己価値の再編』」であるが，このプロセスは決して平坦ではなく葛藤を経て辿りつくものであり，無為に陥る危険性をはらんでいることを留意すべきである，という。

彼らは，無力感を補償するために，表面的な形式や立場に固執する傾向があり，それを周囲からの称賛や評価で補強しようとする。そして，この場合，評価の主たる対象が本人にとって親近性を帯びた周囲の特定の人たち，すなわち「個別的具体的他者」でないところに特徴がある。彼らの多くは，特定の友人も殆どおらず家族とも疎遠であるため，不特定対象としての自己と対置される「世間一般」が主たる対象となる。また，「世間一般」が対象となるのであるから，その評価を得る道具は世間一般の誰にでも分かるような世俗的な肩書きや資格などに象徴される表面的・形式的なものにならざるを得ない。このような傾向は，「うつ病者においてみられる個人的親和的状況下における仕事や生活それ自体に密着した具体的評価への関心のもち方と著しい対照を示す」。

うつ病の学生には第一志望校にこだわり続けるという心性は見られない。彼らは，表面的な形式や立場ではなく，きちんと学業や課外活動に取り組むことに価値を置く。また，学友との親和的関係を作り上げ，それを維持することに心を配る。神田橋（1986）は，うつ病発症の準備状態としての心のあり方について，「その病因たる心のあり方が『合体』をめぐる病理である。その現実場面の表出は『馴染もう』とする努力である。状況や他者との間にしっくりとした関係を築こうと努める傾向である」と指摘する。彼らは適応的で正しい大学生活が送れないことでの葛藤で苦しむのである。

統合失調症の学生は，発症した事実と，そのための学業の挫折による深刻な自己価値の崩壊は避けられない。自己価値の回復と名誉を一気に挽回するために，手の届きそうにない夢をもつことがある。学者になること（講義にはほとんど出ることがないが，いつも分厚い経済学の原書を持ち歩いていた統合失調症の学生がいた），司法試験を目指すこと，医学部の再受験，一度は諦めかけた一流と評価される大学の再受験などである。

3. 再受験と強迫性性格

「受験勉強そのものに執着するタイプの再受験希望」があることを小柳（2001）は指摘している。受験勉強は苦しいといわれるが，ある種の人たちには充実感をもたらす。「限定された目標があり，努力が直接的に反映されやすい明快な世界でもある」からである。大学に入ることは，合格という目的を果たし，「目標の真空地帯」に放り込まれることである。それは同時に，新たな目標を模索することが可能な時空間を手に入れたことでもあるが，「自分がどこにいるのか，どこに進もうとし，どこまで進んでいるのか」がわかりにくい世界である。これは，「白黒のはっきりしないと気が済まない強迫性の高い人にとっては，もっとも苦手な状況」であり，「あいまいさゆえの苦しさから逃れるために，馴染みのある受験勉強に戻る人も出てくる」。「受験という枠がはっきりしているが故の安心感を求め，目的のない再受験に向かうのである」。

筆者は「受験勉強そのものに執着するタイプ」で実際に再受験する学生とは出会っていない。強迫性性格の学生は，一時曖昧さのなかに置かれ，現在を虚しく，つまらないと感じ，目標に向かって一心に努力していた時期に戻りたいと考えるのであるが，前期の終わりごろまでには落ち着いていった。彼らが，再受験を断念できるのは，曖昧さに構造を与えられるときである。卒業後の進路がはっきりすること（生活の仕方を規定できる，例えば国家資格取得の勉強を始める）などである。

4. 親との関係性の中で，再受験がテーマになる事例

親との葛藤の中で再受験がテーマになることがある。2つの事例を紹介する。

事例3　分離不安から再受験した女子学生

入学した年の6月に「何もやる気がしない」という主訴で来談している。家から通える大学にしなさい，という両親の説得を受け入れず，実家を離れ，他県の大学に入学した。ひとりで生活してみたくて，説得を振り切って親元を離れた，という。親の意向に逆らったのは初めてだったが，ひとりの生活を始めてすぐ後悔が生まれた。心細くて気持ちが沈み，友人もできなかった。母親に「退学したい」と伝えたら，それ見たことか，言うことを聞けばよかったのだ，という反応だった，という。「親の言うことを聞いていれば間違いない（将来の結婚さえも），と改めて思う」と語った。彼女は退学し，実家に戻った。翌年の6月に手紙をもらった。手紙には，実家から通える専門学校に入学したこと，以前ように気持ちが沈むことは無くなったこと，医療系の国家資格を取得するために頑張って

いること，そして最後に思い掛けない不思議な夢を見たことについて書かれてあった。その夢は「お風呂場で，裸でご飯を食べている。側に両親が死んで横たわっている。それでも平気で食べている。ふっと私が殺したのだろうか，と考えたら怖くなって目が覚めた」という内容であり，印象が強烈で記憶から消えないと言う。

夢の意義について考えるとき，意識と無意識の相補性という視点が大切になるが，この夢は逆補償の夢であろう。「否定的な補償といえるもので，意識の態度を引き下げようとするものである。意識の態度があまりにも良すぎたり，高くなりすぎたりしているとき，それを下に下げようとするような機能を夢が示すわけである」（河合，1967）。両親を絶対と考える（両親に頼りすぎている）彼女が，両親が死んで横たわっている側で平気でご飯を食べている，という夢を見たことは興味深い。彼女の親への高くなりすぎている態度を否定的に補償するものであり，両親からの自立がテーマになっている夢と理解することができる。

事例4　再受験が母親との葛藤の中でテーマになった女子学生

経済学部2年生のある女子学生は，絵を学ぶために，退学して美術系の大学に入学したいと考えていた。経済学部に進んだのは，会社を経営していた父親がひとり娘である彼女に卒業後は仕事を手伝わせたい，と考えていたからである。母親は，退学に断固として反対した。彼女は名門と評価される大学に付属の幼稚園から進んでいた。娘が，そのまま卒業することが母親の願いだったが，彼女は聞き入れず退学を主張した。母親は激しい人で，「酷いことを平気で言う人」とよく憤慨していた。そんな折，彼女を小さい頃からとても可愛がってくれた人が急死した。祖父のお抱え運転手であり，祖父が亡くなった後は，自ら望んでお手伝いさんとして一緒に生活し，一生涯独身を通した男性である。彼女は，退学の意志を変えた。「自分を愛してくれる存在の大きさを実感した。母親も自分を愛してくれている。母親が言うように大学を卒業しようと思う。絵の勉強は卒業してから，専門学校でやろうと思う」とのことだった。

こじれた問題が偶然の出来事によって解決されることはしばしば体験するところである。当然ながらカウンセラーの計らいを超えている。

5. 憧れ，ロマンチシズム（恋愛に近い）

受験生は憧れの大学に入学すれば幸せになれると空想しつつ受験勉強に打ち込む。願いが叶わず，仕方なく入学した大学は色褪せてみえる。すべてが虚しくつまらなく感じられる。学生は憧れの大学に魅了されている。恋愛に近いのであるから，相手の悪口を言えば，学生をひどく不快にするか，恋慕の情を強めてしまうことになりかねない。今いる大学の素敵なところを探し出し，「そう捨てたものではない」と思えて（不本意入学であっても，再受験は困難な道なので，こう思いたいのは自然で

ある），そのうちあきらめる学生もいる。あきらめきれないときは，もう一度こっぴどく拒否される（再度，不合格）しかない。

恋愛に近いとは言え，一時の迷いと片付けられるものではない。彼らは，憧れの大学に一体化し，大学のもつ個性を身につけたいと願っている。同一化の機制である。それは，アイデンティティの形成に寄与する。

6. 肌があわない，あるいは馴染めないという理由での再受験

肌があわず馴染めない，という理由で再受験を考える学生がいる。雰囲気が洗練されて華やかな感じの女子学生が多い，という定評のある大学で，素朴で地味な感じの女子学生が，その印象に戸惑い再受験を考え来室したことがあった。事例を紹介する。

事例5　周りの学生に劣等コンプレックスを感じる，と訴える女子学生

入学した年の5月に来室。「まわりの女子学生に馴染めない。私は，方言もあって，恥ずかしくて級友に話しかけられない」という。筆者は，最初の来室での挨拶が筆者の祖父母がしゃべる正しい東北弁だったのには驚いたが，どうしてこのような学生が，この大学を選んだのだろうと疑問を感じつつ話を聴いた。ぼんやりとした華やかさへの憧れがあって入学したが，まわりにいる女子学生の華やかな雰囲気に戸惑いと怯えを感じる，という（地味な自分に劣等コンプレックスをもっている）。この学生は，慰めたり（「大丈夫，時間をかければ馴染んでいける」），馴染みにくい大学にいることの意味（自分を洗練させていく）を話し合っていくことで大学に残る覚悟ができていった。

彼女は，卒業時に相談室を訪ねてくれたが，ずいぶんと雰囲気が変わっており，派手さ華やかさに怯まなくなっていた。

7. もっと努力した上でもう一度挑戦したいという動機

「中途半端な努力しかしてこなかった。もっと努力して，もう一度，第一志望の大学を受験したい。それで駄目ならあきらめられと思う。このままではあきらめ切れない」といった内容の訴えをする学生がいる。彼らは神経をすり減らしておらず，余力がある。「自分はもっとできるはずで，この程度の成果では満足できない」という気持ちがある。

自分の能力を確認するには，事に当たって一生懸命取り組み必要がある。自分がどこまでできるのかを知ることは落ち着きを生むように思う。空想的な自己像を修正できるからである。傷つきやすいために，こうした試みを避け続ける人がいる。誇大的な自己像にしがみつき，それが傷つけられることにいつも怯えることになる。大学生活全般から退却し，家族以外の対人関係をほとんどもたない「引きこもり」の学生にしばしば見られる心性である。

このように考えると，気が済むようにやってみるのもよい，と思われるのである。

8. 合理的な動機

学校歴に関連しての劣等コンプレックスとは無縁な動機から再受験を考える学生もいる。それは，例えば，自分の志望（専門あるいは職業）にぴったりと合う学部・専攻を選びたいという理由である。

この動機をもつ学生は職業の選択もはっきりしていることが多い。入学してみて，選んだ学科が本来やりたい勉強とは違いがあることが体験的にわかり，それを我慢するのではなく志望とぴったり一致する学科をもつ大学を再受験したい，というものである。一度はあきらめようと思ったが，講義に出てみて，やはり願いを叶えたい，という気持ちから来談する。英文学科に不本意入学したが英文学に関心が持てず，本来学びたかった英語学を学ぶために外国語学部の英語科を再受験したい，と考えるのがその例である。望まない大学に在籍している劣等コンプレックスから生じる動機ではないので明るい印象がある。

V　再受験を考える学生との面接の要件

1. カウンセリングの基本線

再受験のカウンセリングにおいては，心理的な意味で受験生から大学生になることがテーマになる事例もあれば，事例1のように数年の軽症アパシーを経過してから生き方を定めて他大学に移り，心機一転，新たな学生生活を送るまでを支えることもある。筆者は，自分の夢に再度挑戦することはすばらしい，などと感じて無邪気に勧めることはしないが，大人の分別から危険性を強調して即座に否定することもしない。カウンセリングは，再受験の危険性（例えば，再受験に繰り返し失敗し，進退きわまる事態）に配慮しつつ学生の葛藤と迷いを丹念に聞いていく作業になる。その過程で熱が冷めることもあれば，やはり再受験をしようと覚悟を決める学生もいる。

2. 再受験と劣等コンプレックスの解消

再受験での成功は劣等コンプレックスを直接的に解消することになる。事例1の男子学生は，いつも劣等コンプレックスで苦しんでいたが，再受験で念願の大学に合格した。かつてはその大学の名を目にしては辛い思いをしたが，それが消え，「何の憂いもなく，こんなに楽な気持ちになれたのがうれしい」と彼が語ったのが忘れられない。もちろん，この学生は劣等コンプレックスの解消のためだけで再受験したのではなく，自己の進路を定めた上での行動である。

頭から離れない深刻なコンプレックスに向き合い，直接的に解消することは自己肯定感と気持ちの安定を生むのである。

3. 迷いつつも細々とでも学業はこなしていくのが良い

再受験を考える学生は辛く孤独である。まわりの大学生が大学生活に馴染もうとしている中で，ひとり疎外されるからである。まわりの学生も彼の考えを知れば近づくことを避ける。学業にも身が入

らない。どっちつかずの状態をいつまでも続けることはできれば避けたい。しかし，きっぱりとはあきらめきれず何年も未決定のまま鬱々とする学生もいる。悩みつつも細々とでも学業はこなしていくのが良い。そのうちに魅力的な目標が見つかり落ち着いていく。不合格になった大学の大学院に進学することを目標とする学生もいる。

全く単位を修得しないでいると，当然ながら留年を重ね，適応はますます困難になる。親しかった友人は上級生になり，あるいは卒業してしまう。年齢差のある学生と友人になろうという気もなくなる。友人のいない大学に魅力を感じなくなり，退学せざるを得なくなる。ここに至って，自分の進むべき道を定め，再受験を成功させる学生もいるが，多くは全くの疎外感に苦しみ，退学を考えても進むべき道も見つからず途方に暮れてしまうことになる。

4. 何度も繰り返させないこと

西丸（2006）は，大学受験における浪人の効果について調査したが，浪人することは，現役で入学するよりも，入学する大学難易度を高める効果があるが，二浪することは，予想に反して，むしろ学力が低下し，入学する大学難易度が現役で大学に入学した者より低くなることを確認している。

矢花（1978）は，TPI検査を使って，大学生と浪人生の精神衛生を比較しているが，浪人生は神経症的であり，浪人の年数を重ねると神経症的傾向が強まり，また，スクリーニングによって抽出された症例の面接結果によると，多年浪人になるにつれてapathy大学生が増加する傾向がうかがえる，という。

熊倉（1991）が予備校生に施行した質問紙調査[1]によれば，受験生は，「集中力がない」という訴えを主として，一方で「いらいらする」，「些細なことが気になる」，対人緊張などの刺激性亢進と，他方で無気力，億劫，抑うつ気分など一種の衰弱が共存した状態にある。

この「受験生だれにでも起こりうる非特異的な消耗状態（受験生症候群）」は伝統的精神医学における神経衰弱概念とほとんど同じであり，保崎（1967）によるBeard型の神経衰弱（「刺激性衰弱」irritable weakness）に分類されるという。熊倉の調査では一浪と多年浪人との比較はなされていないが，非特異的な消耗状態は多年浪人になるにつれて強まることは容易に予測できることである。

以上の知見は，浪人を重ねることの非効率を示している。稀に何度も再受験を繰り返す（多くは，留年も繰り返す）学生がいるが，それは危険なことである。大学生になってまで受験勉強を数年，努力し続けることは無理である。神経が衰弱し，勉強の効率は必ず低下し，学力も低下する。数回の挫折による深刻な自己価値の低下も大きい。夢を断念したとしても，大学への適応は困難となり，後悔に苦しむことになる（早めに止めとけばよかった）。再受験は1回で断念すべきである。しかも，現役で入学した学生の1回のみの再受験が無難ではないか。再受験をあきらめることのできない学生には，「浪人生活で身も心も疲れているでしょうから，このまま受験勉強を続けるのは無理です（彼らは，このことをはっきりと自覚できる）。しばらくはサークルにでもはいって学生生活を楽しみ，頭を休めてはどうか」と勧める。学生生活を楽しいと感じるようになると再受験の熱は冷める。

但し，断続的な再受験は成功することがある。軽症アパシーの学生であったが，再受験に1度失敗し，英語の講義以外は出席せず，アルバイトに精を出していた。面接の予約はほとんど守られず，気が向くと来談した。自分について，人に受け入れられること少なく劣等コンプレックスが強く，生きにくい人間であることをしばしば語った。3年目に自己推薦入試に失敗したが，5年目に再び自己推薦入試に失敗した後，一般入試で念願の大学に入学を果たした。その年の秋に近況を知らせる電話をもらったが，まわりは個性的な学生が多く，楽しく学生生活を送っているとのことだった。

5. 仮面浪人でいること

再受験を考える学生の多くは，学籍をもちながら受験勉強をする。しかし，稀に退学した上で再受験を試みる学生がいる。2度3度と繰り返す人である。学費がもったいない，などの理由である。この決断は避けるべきである。実力が低下していくのが普通であり（上述），終いには，以前は考えに入らなかった大学に入るしか仕方がなくなるからである。その挫折感は強烈であろう。「退学しなければよかった。取り返しのつかないことをしてしまった」と痛烈に後悔することになる。

6. 統合失調症学生の再受験 ――― 叶えられそうにない夢について

総合失調症の学生が叶えられそうにない夢をもつとき，それを非現実的として否定すべきではない。彼らは，現実的な努力はできないでいるが，その夢は自分が進むべき方向性を示し，自尊心を保護し（「今は仮の姿だ」），無力感を補償するものである。彼を支えるものであるから大切にすべきである。障害がありながらも何とか生きていけるという社会的効力感が増すといつの間にか消えるものである。

前述したように，彼らは，深刻な自己価値の低下と無力感を周囲（「個別的具体的他者」ではなく「世間一般」）からの称賛や評価で補強しようとして，表面的な形式や立場，例えば世俗的な肩書きや資格（大学生ならば，一流大学の学生，医師の国家資格など）にこだわる。カウンセラーは，「個別的具体的他者」として彼らと個人的，親和的関係を作らねばならない。何故ならば，このような関係は障害の受容を助け，表面的な形式や立場へのこだわりを薄めるからである。もちろん，それはカウンセラーに限らない。家族との関係性が大事である。学者になることを夢見ていた男子学生は，3年の休学期間を含めて9年在籍し，その間いくつかのアルバイトを体験し，卒業後はそのうちのひとつを仕事とした。軽作業である。彼の兄は，結婚はせず彼と同居した。夏の休暇には，よく郷里の東北北部を旅行した。彼は，「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホと弟のテオドルスの関係のようだ」と，しばしばうれしそうに語った。テオドルスは兄ゴッホを精神的，物質的に支え，ふたりの間の文通は生涯続いた。書簡集は彼の愛読書である。学者になる夢はいつ頃か消えていた。

7. カウンセラーの逆転移

最後に，カウンセラーの逆転移について述べる。カウンセラー自身が学校歴に劣等コンプレックス

があるとき，偏差値上位の大学を再受験したいと訴える学生に否定的な感情をもちやすく，一面的な見方をしがちである。例えば，「権威的なやつだ」となる。カウンセラーは，このことをよく自覚すべきである。否定的な感情は仕方ないこととして内に抱きつつ，じっくり話しを聴くことがどうしても必要である。学生が権威的であるだけの人間でないことに気づけるからである。

対照的に再受験に成功し生き方が定まったカウンセラーである場合，否定的な感情から，再受験をつまらないことと片付けることはないだろうが，むやみに勧めたくなるかも知れない。意義も認めつつ危険性への配慮を忘れてはならない。できれば，カウンセラーは学校歴コンプレックスをもたず，学校歴とその人の価値は無関係であることを腹の底から分かっているのが良い。学生がもつ学校歴コンプレックスの解消につながるからである。

Ⅵ　おわりに

再受験がテーマになるのはほとんどが入学期である。中に入学後数年経過してから，あるいは卒業期にテーマになることがある。それで再受験に成功する学生を知ると，そのための努力ができる「心理的とき」があることを感じる。生き方が決まるときである。そこまでの長い内的な過程は，現実から目をそらし決断を先延ばしする逃避としてだけ片付けられるものではなく，再生につながるような深い意味をもつように思われる。

親密な対人関係を結ぶ能力が育っている人は幸いである。再受験して，不運にも望みがかなわなかったとき，彼らは，他者との親密な関係のなかで受け入れられることで少し落ち着き，上昇志向から他の学生との親和的関係へ，という転換が生じて，学生生活を送れるようになり，再受験を断念できる。その契機になるのがサークルである。人間関係に不器用な学生には，自由度の高いサークル（やるべき決まったこともなく，自由であるために個と個が向き合ってしまう）よりも，主眼とする活動にきちんと取り組んでいるサークルの方が馴染みやすいようである。

注

1）予備校学生のカウンセリング来談者の相談内容を症状的なものに限らず整理して作成した質問紙。身体面，勉学面，対人関係，情緒面の4つの領域から構成されている。

引用文献

蜂谷英彦・村田信男　1989　リハビリテーション．土居健郎他編　異常心理学講座9「治療学」，みすず書房，397–454.

樋口美雄　1994　大学教育と所得分配．石川経夫編 日本の所得と富の分配．東京大学出版会.

本田由紀・平沢和司　2007　学歴社会・受験戦争　序論．本田・平沢編　リーディングス　日本の教育と社会第2巻「学歴社会・受験戦争」.

保崎秀夫　1967　心気状態ならびに神経衰弱状態（心気症）．井村恒郎他編　神経症，医学書院，158–167.

神田橋條治　1986　うつ病の回復過程の指標．精神科治療学1（3），355–360.

河合隼雄　1967　夢分析．ユング心理学入門，培風館，142–192.

河合隼雄　1976　能力主義と平等主義．母性社会日本の病理，中央公論社，50–67.
河合隼雄　1995　文化・社会のなかの教育．臨床教育学入門，岩波書店，35–83.
笠原　嘉　1973　現代の神経症 —— とくに神経症性アパシー（仮称）について．臨床精神医学2，国際医書出版，153–162.
笠原　嘉　1976　スチューデント・アパシー．精神科医のノート，みすず書房，3–15.
笠原　嘉　1978　退却神経症withdrawal neurosisという新カテゴリーの提唱．中井久夫・山中康裕編　思春期の精神病理と治療，岩崎学術出版，287–319.
吉良安之　2001　入学期の特徴．鶴田和美編　学生のための心理相談　培風館，12–23.
熊倉伸宏　1991　大学受験生にみられる神経衰弱状態の分析．こころの健康6（2），74–81.
中井久夫　1984a　分裂病の発病過程とその転導．中井久夫著作集第1巻「分裂病」，岩崎学術出版，181–238.
中井久夫　1984b　『精神科治療への手引』より．中井久夫著作集第1巻「分裂病」，岩崎学術出版，273–327.
西丸良一　2006　大学受験における浪人の効果　——計量分析を用いて——．佛大　社会学31，14–23.
小柳晴生　2001　不登校学生の心模様．鶴田和美編　学生のための心理相談，培風館，182–195.
島　一則　1999　高度成長期以降の学歴・キャリア・所得 —— 所得関数の変化にみられる日本社会の一断面．組織科学33（2），23–32.
鶴田和美　2001　学生生活サイクルとは．鶴田和美編　学生のための心理相談，培風館，2–11.
矢花芙美子　1978　予備校生（いわゆる受験浪人）の臨床精神医学的研究．日大医誌37（12），1503–1514.
山田和夫　1987　スチューデント・アパシーの基本病理 —— 長期縦断的観察の60例から ——．平井富雄監修　現代人の心理と病理，サイエンス社，355–374.
山田和夫　1998　スチューデント・アパシーと現代学生の自己形成．精神科治療学13（3），297–304.